

10. 原発性肺癌における全身骨シンチグラム

向田 邦俊 宮庄 英明
 上綱 昭光 三島 康弘
 (広島大・2内)
 佐々木正博 山下 征紀
 勝田 静知 小山 矩
 (同・放)
 福原 典昭
 (国療広島)

昭和53年1月より昭和54年6月までの1年6カ月にわれわれが経験した原発性肺癌56例につき、骨転移巣の検索を目的として初回骨シンチグラフィー施行時を中心にその臨床像を検討した。肺癌56例の内訳は、腺癌25例・扁平上皮癌23例・小細胞癌8例である。肺癌56例中初回骨シンチグラムで23例(41.1%)に骨転移を認めた。骨X-Pで骨転移を認めたものは12例(21.4%)であった。骨転移部位は肋骨に最も多くみられ62.5%であり、以下腰椎50%，胸椎37.5%，骨盤29.2%の順であった。組織型別の骨転移頻度は腺癌48%，扁平上皮癌43.5%，小細胞癌25%であった。TNM分類による臨床病期別ではI期40%，II期22.2%，III期48.6%であった。骨転移と血清Al-P値および血清CEA値との関係をみると、双方とも骨転移を認める症例に高値を示す傾向がうかがわれた。

11. 肺門リンパ節シンチグラフィーについて

野井 憲治 沖田 功
 中西 敬 小林 光昭
 橋本 純行 楠元志都生
 根木みゆき
 (山口大・放)
 宇津見博基 稲葉 伸生
 山田 典将
 (同・放部)
 末富 一臣 永野己喜雄
 (下関中央・放)

今回われわれは、基礎実験として成熟家兎を用いて経気管支的に¹⁹⁸Au Colloidを注入し、シンチグラフィーによる肺門リンパ節の抽出を試みた。気管支内滴下群は12例中7例(58%)、気管支壁局注群では13例中10例(77%)に気管分岐部リンパ節の抽出がみられ、局注群の方が抽出率が高かった。単位重量当たりの組織別放射能量の測定でも、剔出リンパ節のCPMは分岐部が最も高値を示した。ついで臨床的応用を試みた。検査対象は当科で診断、治療を行なった12例である。局注1~3日後のシンチグラム像を分類すると、次のようにあった。1)注入部位に留まって拡散しているもの4例、2)鎖骨上窩の抽出されているもの4例、2)縦隔のリンパ節と思われるもの3例、4)肺門のリンパ節と思われるもの3例、5)気管分岐部リンパ節と考えられるもの4例、以上のように描出し得た。疾患ならびに病態により、リンパ節の抽出部位に差異を認めるようである。今後症例を重ねて臨床的意義について明らかにしていきたい。